

# Damballahの女たち

## (Belle and the Followers)

加藤万毘子

### オリオンとベル

John Edgar Wideman (1941— )は、現在活躍中のアフリカ系アメリカ人作家である<sup>1)</sup>。ワイドマンは、アフリカ系アメリカ人作家として親しまれているRichard Wright (1908-1961) , James Baldwin (1924—1987) , そして、Alice Walker (1944— )よりも多くの作品を発表しているが、ワイドマンの名前はかれらほど世に知られていない。

ワイドマンは、Edgar French WidemanとBetty French Widemanの息子として、Washington D. C.で生まれた。一家は、彼の誕生後もなく、Pennsylvania州Pittsburghのアフリカ系アメリカ人居住区であるHomewoodへ移住した。ワイドマンが12才になるまでここに暮らし、一家は、中流以上の白人居住区のShadysideへ移った。彼はシャデイサイドの高校で学び、ペンシルヴァニア大学、さらに、Oxford大学へ進んだ。

このように、アフリカ系アメリカ人居住区以外の生活経験が長いワイドマンであるが、Jessica Lustigとのインタビューで、彼はホームウッドについて次のように語っている“what counts most is what the person inside the story sees. That’s where the life proceeds; that’s where Homewood has a definition” (99)。ホームウッドにおいて、アフリカ系アメリカ人がアメリカへ持ち込むことができなかつたアフリカの伝統的建物、自然、言語などを、“the invisible dimensions of [African] society, of [African] culture” (Lustig 99)として展開するのである。ワイドマンは、ホームウッドを舞台にして、アフリカ系アメリカ人を描くことによって、彼等のアイデンティティを語っているのだ。

Doreatha Drummand Mbaliaが<sup>2)</sup>Toni Morrisonの言葉を引用して、“When you kill the ancestor you kill yourself” (15)と記しているように、ワイドマンにとっても、過去を切り捨てて現在を考えることはできないのである。彼は、今もなお、理解し得ない奴隷制度時代という過去と直面した上で、現在のアフリカ系アメリカ人のアイデンティティを主張し、未来を見つめようとしている。ワイドマンは、書くことによって、過去と現在に橋を架け、さらに未来への橋渡しをしようとするのだ。

その舞台となるのが、ホームウッドなのである。

このワイドマンの作業において、大きな役割を果たすのが、*Damballah*の中では、女たちである。

*Damballah*は*Homewood Trilogy*の中の一部である(加藤47)。“Damballah”から始まり、12の短編からなるこの三部作の第一部を、ワイドマンは*Damballah*と名づけている。これは、彼の実弟に捧げられる物語である。

“Damballah”で語られる奴隷、Orionの振る舞いは示唆的である。オリオンは、白人の奴隷主から与えられる食物はすべて拒否し、キリスト教に改宗することも、もちろんしようとしなない。与えられる食物を食すかわりに、オリオンは、川で自然と一体となり、魚を捕らえて食べるのである。長い時間をかけ、魚を待つオリオンの姿は、彼の仲間たちには、ばかげた姿に見えるのだが、一見文明社会の体裁を整えながら、奴隷制度という冷酷で野蛮な制度を延々と続けたアメリカ社会への抵抗と、オリオンの誇りと、アフリカという自然への回帰の願望を表すものであろう。

さらに、オリオンは、ある日、奴隷の監督者を馬から引き摺り降ろし、蹴飛ばし、この監督の骨をことごとく折り、姿を消してしまう。しかし、再び姿を現した時には、生まれた時のままの姿でポーチに座っているのである。Byermanがいうように、一条まとわぬオリオンの姿は、白人による、労働を含めたすべての搾取の表象である(6)。監督への攻撃は、奴隷制度と人種差別への反乱をあらわすものであろう。白人はこのオリオンを処罰するために、納屋へ引きずっていくのだが、無抵抗のオリオンと、汗を流し流し、たった一人の奴隷に取り組む四人の白人の描写は、差別へのさらなる異議の申し立てである。

*Damballah*の中の殆どの短編は、19世紀半ばにホームウッドへ移住してきたワイドマン一族の実際の物語である。一族の母、Sybela (Belle) Owensは奴隷であった(加藤54)。シベラは、かつての美しく、誇り高い女奴隷のベルに似ているので、ベルという愛称で呼ばれていた。ワイドマン一族の母でもあり、物語の母でもあるベル<sup>3)</sup>は、ワイドマンが冒頭で語る虚構の人物、オリオンの自我と誇りを持ち合わせた実際の女性である。オリオンとベルが示すのは、いかなる外的暴力も、人の内面まで破壊す

ることはできないということである。

## 影の薄い男たち

シベラのベルという愛称は、伝説の女奴隷ベルに由来する。女奴隷たちが農園で白人の男達にもてあそばれていたことは、“The Beginning of Homewood”で語られている「さまざまな髪の色」をした子供たちが物語っている。そして、女奴隷が子供たちを持つことは、母になることではなく、さらに多くの奴隷を生産するための飼育者になることなのである。ゆえに、伝説の女奴隷ベルは、男達の玩具になることを拒否した。奴隷制度の下で、自我と誇りを持ち続けることがどういうことなのかは、容易に想像することができる。農園主の怒りを招いたベルは、罰として頭に籠をかぶせられ、その籠の上に鈴をつけられていた。この伝説の女、ベルのように美しく、誇り高き奴隷ということで、ベルの愛称がシベラに与えられた。

しかし、ホームウッドの母、マザー・ベルには、夫も子供もいた。彼女の夫は白人であり、優しそうであるが、ベル自身の中に何も問題がないわけではない。ベルの内的問題は後に述べるとして、ここでは、彼女の外的問題にのみ触れておきたい。夫、Charlie Bellは農園主の息子であるが、農園主の父が、ベルと子供達を売りに出そうとしていることを知って、チャーリーは、彼等を連れて北部へ逃れることにする。ピッツバーグへ到着して彼等が最初に経験するのは人種差別主義である。彼等が暮らしていた地域の白人が、チャーリーに、アフリカ系アメリカ人女性が同じ地域にいては困ると言うのだ。チャーリーは彼等と争うことなく、妻と子供たちを連れて他の場所へ移るのだが、彼等が去った跡には、“nothing grow or prosper there” (183)<sup>3</sup>。これはワイドマンの人種差別への静かな抵抗かもしれない。自由の身になったベルを待ち受けていたのは人種差別の問題である。

アフリカ系アメリカ人女性にとって人種差別主義は二重苦である。Bell Hooksは、アフリカ系アメリカ人男性が社会で受ける差別のはけ口が女性に向けられることについて次のように述べている。

自分を牢屋にぶち込んだける雇用主に対しては攻撃もできなければ、はむかうこともできない。男

性はその種の暴力を抑圧し、「支配」を握っている状況と私が名づけた場で鬱積を発散しようとする。…  
…男性の暴力のターゲットとされるのは女性である。  
(フックス 179)

社会から男性と同様に受ける差別の上に、アフリカ系アメリカ人女性は、このように、同民族の男性からも虐待されるのである。しかし、ワイドマンは、フェミニズムを意識してか、ホームウッドの男性たちを優しく描いている。*Damballah*のなかの女性たちが男性たちから暴力的行為を受ける場面は殆どないが、人種差別ゆえに職を得ることができないはけ口をアルコールに求める夫たちや、長時間の労働を強いられる夫たちと子供達の間で苦境に立っているのは女たちである。フックスが語る苦しみとは種類を異にするが、彼女たちも、内的には、二重の苦しみ下にあると言えよう。

ワイドマンの母であるLizabethの父、John Frenchは、いつもワインのにおいをさせている。不具のヘイゼルにキャンディーやフルーツを持ってきてやり、彼女の額に優しくキスをするジョン・フレンチは、常に、“left smelled of wine and tabacco” (158)なのである。妻のFreedaは、氷売りのLamuel Strayhornがこのような夫と行動を共にしていると信じているので、彼女はストレイホーンが大嫌いである。ジョン・フレンチは白人の家での仕事をすっぱかされ、朝からワインをのんでいることもあるのだが。ある日、フリーダの女性としてのこまやかな助言を求めて、ジョン・フレンチの家を訪れるストレイホーンを、娘のリザベスは冷たく追い返すだ。フリーダが、“Sent that fool away from here. Tell him your Daddy’s out working”と娘に言ったからである。この場面から、まるで子供を誘いにきたいたずらな仲間を追い返すかのような母親の姿が連想されるが、ギャンブルとワインに浸る男達と娘の教育をいかに上手にさばるかかは、フリーダにとって頭の痛い問題であったのであろう。

ジョン・フレンチのギャンブルとワインのにおいは、フリーダを苛立たせているのだが、彼女のストレイホーンへの振る舞いにリザベスが大いに影響を受けている点に留意したい。ストレイホーンに対応するリザベスは、“when the girl was gone and the door slammed behind her, Strayhorn thought of the little wooden birds who pop out of a clock, chirp their message

and disappear” (25) と、人のいいストレイホーンの視点から、ユーモラスに描かれているが、フリーダの苛立ちのエコーが聞こえてくるようである。

リザベスが母親になる頃は、時は移り、1920年代以降になるが、“Across the Wide Missouri” は、忙しい仕事のため、日常生活のなかで息子のモデルになり得ない父親の姿と、その様な父親と息子、ジョンの間を取り持つリザベスの姿が描かれている。父親の姿が見えにくい状況は、過去における日本の社会での我々の経験と重なって見えるが、“Missouri” の父は、差別ゆえに、息子と顔を合わすことができない程働かねばならないのである。

バイヤーマンがJacques Lacanを引用して語っているように、“the father symbolizes the law” (14) が、世間一般の父親像である時に、アフリカ系アメリカ人の男性像が、飲んだくれているか、犯罪に係わっているにちがないというステレオタイプで捕らえられがちな環境では、息子は父親を人生のモデルとみなしにくいのだ。リザベスの配慮は、息子に懸命に働く父親の姿を見せることであろう。彼女は、ジョンを伴って、彼の父、Edgar Lawsonがウエイターとして忙しく働いているデパートの食堂の前まで行く。父に会ったジョンは、最初は、ぎこちなく父に接するのだが、父が彼のために精一杯尽くしてくれていることを理解し、父と過ごせる午後を大切にしているジョンである。

こうしてみると、飲んだくれのギャンブラーの夫へのフリーダの苛立ちも、息子に確たる父親像を印象づけようとするリザベスの努力も、彼女たちが、理想の家庭の原型を、家父長制の強いイメージの父親像を頂点に構成される家庭に求めているかのように思われる。

“Hazel” の一家の不幸は、Gaybrellaの夫が一家を捨てて去ってしまった父親不在による無秩序であるかのように思われる。Hazelはふとしたことから、兄、Faunに押され、階下に転落し、不具の身になり、人の手を借りなければ何もできない。ゲイブレラは、フォーンを決して許そうとはせず、彼女はもう一人のヘイゼルの兄であるFerdinandを溺愛しているのだが、ファーデイナンドは冷たく、“the sneer, the taunt, the same mocking question he had asked about their father, ……”

(65) と、ゲイブレラのもとを父が去ったことを咎めるのである。一方、フォーンは、最後の時に、親戚に当たるリザベス一人に付き添われて、救急車のなかで、ヘイ

ゼルを誤って突き落とし、不具にしてしまったことが彼の頭から生涯離れることはなかったであろう、“I’m sorry …… I’m sorry, …… Forgive me ……” (67) とくりかえすのである。

フォーンを苦しめ続けていたヘイゼルへの罪の意識に気付くことなく、彼を責め続けたゲイブレラ、ファーデイナンドに夫の失踪を責められながら彼を溺愛するゲイブレラ、こまやかな心配りでヘイゼルの世話をするゲイブレラ、その彼女を動けない身体で冷めた目で観察するヘイゼル。この一家の悲しい行き違いがみられるのだが、ゲイブレラの夫がこの家にいれば、彼女はフォーンを責め続けることもなく、ファーデイナンドへ盲目的な愛情をそそぐことも、ファーデイナンドの彼女への冷酷な視線もなかったであろう。

“Tommy” のトミーは、“Missouri” の食堂で働く父、エドガー・ローソンの次男であるが、この短編では、父親不在がより大きな問題として描かれて行く。兄のジョンは、前述のように、リザベスの努力で父を理解する機会を得たが、トミーにはそのような機会はなかったであろう。

## モデルを失った若者たち

“Tommy” の時代は、1970年頃であると思われるが、この頃のニューヨークの若者の精神の荒廃と街の荒れ果てた様子をSaul Bellowは*Mr. Sammler's Planet*のなかで描いている。若者は思考力を失い、彼等には年長者への尊敬の念も、思いやり気持ちもなく、ニューヨークの街角の電話線は切断され、公衆電話のボックスはトイレット代わりに使用されている。人種問題が絡むホームウツドの荒廃は、いっそうひどいものであったと想像される。Damballahのなかで“Tommy” ほど荒廃した若者の精神と街の様子が描かれている短編はないであろう。主人公のトミーは、ワイドマンの実弟、Robertを指している。トミーは犯罪に巻き込まれて服役中の身である。

荒廃したホームウツドから、現在の日本の社会で問題である崩壊しかかった家庭の姿と人間の尊厳を知らない若者たちの姿も見えてくるが、ホームウツドの若者を見てみよう。彼等にも、日本の若者たち同様に、人間の自然の姿である死に直面する機会がないのだ。彼等が死を人間の自然の姿として受け止めていないのは、動物の死

骸に手を触れることができないトミーを通して語られている。ホームウツの街は、あたかも荒れ果てた若者たちの精神を象徴するかのよう動物の死骸が放置され、誰もそれらを片付けようとするものはない。このことは、彼が死を受け入れていないことを表していると考えられよう。ヴェトナム戦争に従軍した者たちは、彼等が常に死と直面し、死を受け入れざるを得なかったことを語るのである。

The dudes come back from Nam talking about puddles of guts and scraping part of people into plastic bags. They talk about carrying their own bags so they could get stuffed in if they got wasted. (141)

しかし、トミーには遠い世界である。ジョン・フレンチとストレイホーンがごみ箱に捨てられた赤ん坊の死骸を、ヴェストに包み、一家の墓に葬った日も遠くなってしまっているのだ<sup>4</sup>。死を人間の共通の運命として受け入れられない者には、人の命の尊厳も理解できないのだ。

一方、トミーの周辺の大人たちは、若者の人生のモデルにはなり得ないのである。“Tommy”の冒頭に登場する彼の叔父であるCarlは、ジョン・フレンチやストレイホーンが度々酒場で過ごしていたように、バーの常連であることは次の一筋から明らかである、“[Tommy] check out the Velvet Slipper……Carl ain't there yet” (137)。しかし、カールがジョン・フレンチやストレイホーンと異なっているのは、人間の生きる真摯な姿を若者に示し得ないことである。ジョンたちは、不本意ながら、働く姿を示すことはできなかったし、若者のモデルとなるには弱い存在であった。しかしながら、上述の人間の尊厳を尊重する姿を示すことはできた。だが、メタドン<sup>5</sup>をもらうために病院へ行っているカールは、若者に示し得るものは何もないのだ。目標のない若者たちは、麻薬を使用することに快楽を求め、その資金を得るために強盗を企て、人間の尊厳も理解できない者たちは容易に銃の引き金を引いてしまうのである。こうして犯罪に巻き込まれるトミーは、人種差別主義の犠牲者であろう<sup>6</sup>。しかし、この悲しい現実を刈り取らねばならないのは、やはり、女性なのである。

トミーの母、リザベスは、トミーを慰め、励ますために、彼の刑務所へ通うのだが、彼女にとってこの仕事は

拷問に等しい。暑さ寒さの中をバスを乗り継ぎ、長い時間をかけてトミーの所に辿り着かねばならない外的困難は、彼女の内的苦しみを語っているかのようなのである。刑務所へ向かうには、彼女は “[she] must forget who [she] is and be prepared to surrender [her] dignity” (157) である。途中の彼女の苦しみには、人々のリザベスに対する目もある。彼等が彼女に、どれ程注意をはらっているかに関係なく、彼女には人々の目がすべて彼女の恥じを見通しているかのように思われるのだ。

しかし、リザベスにとって問題なのは、単なる番号と化したトミーに力を与えられないだけでなく、彼女自身からも “voice” が消え去ろうとしていることである。

前述のホームウツの母、マザー・ベルの部分で保留にしたベルの内的問題というのはこの “voice” (178) である。ベルの体は、チャーリーによって、子供達と共に、農園から連れ出された時に自由になった。しかし、ベルが本当に自由になれるのは、チャーリーの妻としてでもなく、子供達の母としてでもなく、一人のvoiceを持った女性として歩き始められる時である。Voiceとは、彼女が、一人のアフリカ系アメリカ人として、アイデンティティを持ち、彼女自身を主張し、語ることができることである。それは、彼女自身の “self” にほかならない。“Nothing is lost” (178) とワイドマンが語っているが、voiceを失うことがなければ、バイヤーマンが言うように、「アメリカ社会が長年に渡って軽視（無視）してきたアフリカ系アメリカ人のアイデンティティを失うことはない」のである。

しかしながら、リザベスはすべての現実から逃避しようとする。昔とさまがわりしたホームウツの街と高い壁の向こうで極悪な生活を強いられているトミーの毎日と、彼を壁の向こうへ追いやった現実から逃避したいと思うのだ。

……the river glided brownly, silently past but nothing else was real. Everything so still and quiet she believed that she had fallen out of time, that she had slipped into an empty place between worlds, a place unknown, undreamed of till that moment, a tiny crack between two worlds that was somehow in its emptiness and stillness vaster than both. (159)

リザベスが、刑務所の側の川のひとつりで、トミーに思いをはせながら静かに流れる川を見つめている場面である。彼女は、タイムスリップして、彼女の場とトミーの場以外の別の世界に入り込んでいったかのように感じるのだ。そして、トミーが彼の独房からこの流れを見ることができたら、彼はどう思うだろうかと思いをめぐらすリザベスである。できれば、現実からぬけだして、トミーと共有できる別の世界へ入り込みたいリザベスの願望である。

ホームウッドへもどったりリザベスは、この街の通りを歩きながら、昔のホームウッドの人々に思いをはせながら、慰められ、失いかけたvoiceをとりもどすのだ。彼女が、現実から逃避し、トミーと共有したいと切望した世界は、彼女の中に蘇ったこの遠い日の人々が、外的暴力に屈することなく、voiceを保ち続け、誇りを持って生きた世界であろう。リザベスがトミーの所へ通い、彼を励まし、伝え続けなければならないのは、この過去の世界である。

## 物語の力

Damballahがワイドマンの服役中の実弟に捧げられた物語であることはすでに述べた。リザベスがトミーに伝えなければならないvoiceを物語形式でトミーに贈るのが兄のワイドマンである。物語は読む者に想像力を求め、読む者を想像の世界へいざなう。また、物語は、読者がそれに共感を抱こうが、反感を抱こうが、様々な人生を伝えるであろう。トミーは、このような経験をしながら、Damballahの世界に入り込むことができるのである。

物語がもたらすさまざまな世界は、読者に、読者の経験外の世界とそれらの世界の人々が持つ多くの見解の存在を認識させる。読者は、想像力を働かせることで、各見解を理解しようとし、異なった見解を、自分の見解とやかに調和させるかを考えてみるができる。想像力は、相反するものを調和させる力である。物語が伝える人生は、読者に、自分自身の人生とその人生を対比させたり、人の人生の意味を考えさせたりすることができるのだ。

Damballahの物語は、攻撃的な言葉で語られることはないが、すでにみてきたように、人種差別主義下にある人々の物語である。面会に訪れたリザベスにトミーがぶつ

ける“anger” (160) は、過去の生活と現在の刑務所での極悪な状態への不満の爆発である。トミーはやり場のないこの怒りをリザベスにぶつけるのである。ワイドマンは、“Tommy”で、彼の幼い日の家庭生活には触れていないが、“Rashad”の“……she passed every morning on her way to work” (126) から、リザベスは仕事に出ていて、トミーは、いわゆる日本の「鍵っ子」であったのかも知れないと推測される。成人すると共に、彼は差別主義にいつそう敏感になり、幼い日の寂しさは、差別主義のためであったと理解するのであろう。

トミーの現状に関しては、次の一節がそれを語っている。

[C]onditions in the prison constituted cruel and unusual punishment and thereby violated the prisoners' human rights.” (184)

刑務所内でも、差別の問題は無視できないであろう。ホームウッドの物語は、単に差別主義に怒りを爆発させ、犯罪の原因をも差別のせいにするのがどういふことであるのか、トミーに静かに説いて聞かせるのである。

トミーは、ホームウッドの物語のなかに、差別されつつ真摯に生きた人々の姿を読み取り、行間から、彼等の気持ちを探ることができたのだ。トミーは、父、ローソンの働く姿を見ることも、父と多く語ることもできなかったであろう。しかし、物語、“Across the Wide Missouri”の世界は、トミーに、人種差別主義にもかかわらず、限られた選択肢の中から選んだ仕事に励む父の勤勉さと、母の思いやりを提示することができるのだ。夜勤のために、昼間は、寝息をたてて眠っているローソンの眠りを妨げないように気づかうリザベス。また、ローソンの働く姿を見せ、ローソンとジョンの語らいの機会のため、ジョンをローソンの職場へつれだすリザベスの心づかい。“Missouri”から、トミーは、彼には与えられなかったと思っていた人生のモデルが父であったことに気づくであろう。さらに、想像力によって、忙しい仕事とその賃金のために、子供達と語る時間も、彼等に映画をみせる経済的余裕もない両親の辛い気持ちを推測し得るのだ。そうすれば、刑務所へ通い続けるリザベスの気持ちを理解し、彼女に怒りをぶつけることがいかなることなのかをも悟るであろう。

“The Beginning of Homewood”の女奴隷ベルと、

マザー・ベルの物語は、トミーを励まし、彼は彼女たちの人生に共感を覚えるのだ。トミーは、彼の現在の姿、“[leg] irons forced [Tommy] to shuffle; [his] upper bod[y] swayed to make up for the drag of the iron” (179) と、籠をかぶせられたまま20年間過ごしたベルと、マザー・ベルの苦難の道を重ね合わせてみるにちがいない。かれはベルから誇りと、マザー・ベルから希望を得ることができるのだ。

しかし、トミーが二人のベルから学ばねばならないのは、彼等が自由を得るためにどのように戦ったかということである。ワイドマンは、誇り高い女達とトミーについて、次のように語っている。“You”はトミーへの呼び掛けである

The Court could set your crime against Sybela's, the price of our freedom against yours. The Court could ask why you are where you are, and why the rest of us here.” (184)

二人の女たちは、奴隷制度の下にあっても、精神と肉体の自由のために戦った、しかし、彼女たちは法を犯すことはなかった。だからこそ、voiceを守り得た彼女たちから、“nothing is lost” (178) なのである。

## 女たちの声

理由は何であれ、頼りにならない夫、ジョン・フレンチに苛立つフリーダ、夫が家を捨てた後で家族の秩序を維持するために苦勞するゲイブレラ。息子にとっては存在感のうすいエドガー・ローソンと息子の関係を改善しようと努力するリザベス、身近な男性であるカールすら人生のモデルにはならず、道を踏み誤ったトミーを力づけるために苦難を乗り越えねばならないリザベス。このように、*Damballah*は、家父長制の柱となる力の欠如によって崩壊しかかった家庭を支える女たちの苦勞の物語として捕らえることもできよう。人種差別主義の中での女たちの苦難の道を描き出したワイドマンは、アメリカ社会におけるアフリカ系アメリカ人への搾取を、女たちを通して訴えているとの見方もできる。

ワイドマンが物語形式の作品を書くことになったのは、祖父の葬儀に一族が集まった折りに、一族の中の女性、

Mayがホームウッズの歴史を語るのを耳にしたのがきっかけであった。メイが語る物語の主役は、マザー・ベルである。人種差別主義の下で二重の苦難を負わねばならないのは女性であるが、その苦難の道に未来を示す灯を灯すのも、また、女たちである。Pattonは*Women in Chains*で、奴隷制度下の女性たちの苦しみを語ると同時に、大切なのは、“not what was done to slave women, but what they did with what was done to them” (46) と語っているが、*Damballah*の女たちにとっても重要なのは、人種差別の下で力を失わざるを得ない男達のかげでの彼女たちの苦勞よりも、彼女たちが苦難の山をどう乗り越えたかということである。*Damballah*の女たちは“voice”を持って乗り越え、voiceを後の世代に伝えるのである。

## 注

- 1 ワイドマンの経歴については、Keith E. Byermanを参照。
- 2 一族の母、ベルについては、以下、バイヤーマンにならって、「マザー・ベル」とする。
- 3 *The Homewood Trilogy*に関する言及は括弧のないページ数で示す。
- 4 ジョン・フレンチとストレイホーンが、捨てられていた赤ん坊の死体を手厚く葬る様子については、『紀要』第5号で述べた。
- 5 “Methadone”はモルヒネに似た鎮痛薬。しかし、“methadone maintenance,”すなわち、ヘロイン中毒の治療中の代用薬と考えられる。
- 6 ワイドマンは、トミーの罪を被害者意識でみているわけではない。

## 参考文献

- Byerman, Keith E. *A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1998.
- フックス, ベル. 『ブラックフェミニストの主張』清水久美訳 勁草書房 1997
- 加藤, 万貴子. 「ホームウッズの人々の絆」『名古屋造形芸術大学紀要』5 (1999) 49-55.

- Lentricchia, Frank. *Critical Terms for Literary Study*.  
Chicago: U of Chicago P, 1990.
- Lustig, Jessica. "Home: A Interview with John  
Edgar Wideman." Byerman. *Short  
Fiction* 98-100.
- Mbalia, Doreatha Drummond. *John Edgar Wideman:  
Reaching the African Personality*. London  
and Tronto: Associated UP, 1995.
- Miller, J. Hillis. "Narrative." Lentricchia. *Critical  
Terms* 66-79.
- Patton, Venetria K. *Women in Chains: The Legacy  
of Slavery in Black Women's Fiction*.  
Albany: State U of New York P, 2000.
- Rowell, Charles. "An Interview with John Edgar  
Wideman." Byerman. *Short Fiction* 90-97.
- Wideman, John Edgar. *The Homewood Trilogy:  
Damballah · Hiding Place · Sent for you  
Yesterday*. New York : Avon Book,  
1985.
- Wilfred, Samuels. "Going Home: A Conversation  
with John Edgar Wideman." Byerman.  
*Short Fiction* 83-89.